

還暦事務職コーディネーターの奮戦記

—すさみ町と摂南大学をつないで八年—

摂南大学研究支援・社会連携センター（地域連携部門） 担当課長 小出修嗣

1. はじめに

「摂南大学の学生が、なぜ和歌山県すさみ町で活動しているんですか？」と、よく聞かれる。本学から南に自動車で約二〇〇キロメートル、貸切バスで三時間の和歌山県南端部近くに位置するのが「すさみ町」である。人口は二〇一八年一月末現在で四一三〇人。雄大な太平洋に面し町土の約九三％は林野が占め人口減少が続く。すさみ町は、三九ある集落のうち二四が限界集落（人口の五〇％以上が六五歳以上）である。

一方、本学は大阪府の北東部、寝屋川市に大学本部と五学部、枚方市に二学部を擁し、学生数はすさみ町の人口の二倍、八千人を超える中規模の総合大学である。本学では、「Smart and Human」というタグラインのもと「人と人との絆」を大切に教職協働活動を実践している。その一つが、二〇一〇年度から本格的に展開している本学独自の「摂南大学PBLプロジェクト」（以下、「摂南PBL」という）

活動である。摂南PBL草創期の代表格が「すさみ町における過疎地域活性化支援プロジェクト」（スタート時の名称は「過疎地域を大学生の力で活性化するプロジェクト」）で、今日まで継続して活動している。冒頭に述べた問いの答え、すさみ町を元気にしたいと八年前にはじまったこの活動を本稿で紹介する。

2. 本学独自の「摂南大学PBLプロジェクト」

私は「研究支援・社会連携センター地域連携部門」で、事務職コーディネーターとして摂南PBL活動の後方支援のため、担当教員と協働して自治体等との調整に当たっている。本センターは、二〇一七年春「研究支援センター」と「地域連携センター」が組織統合し誕生した。統合前の「地域連携センター」は、大学の役割に第三の柱として「地域連携・社会連携」が加わった二〇〇六年の四月に逸早く開設された。すさみ町は、寝屋川市の友好都市関係にあり、すさみ町長から「過疎地を若い学生の力で元気にし

たい」との強い要請を受け、摂南PBLの活動地域を広げたい本学の想いと一致。学長はじめ関係者がすさみ町を訪ね、二〇一〇年三月三日に連携協定を締結した。私は学園広報室から二〇〇八年九月、当時の地域連携センターに着任。すさみ町との協定に奔走したことを契機に、すさみ町と本学をつなぐ役割を担っている。

摂南PBLは、文部科学省の二〇〇九年度「大学教育・学生支援推進事業」学生支援推進プログラム（学生支援GP）の採択を受け、三年間の採択期間終了後も本学独自で継続実施している看板活動の一つである。本学の建学の精神に謳う「世のため、人のため、地域のため」のもと、教育理念である「自ら課題を発見し、そして解決することができる知的専門職業人の育成」の目的を実践するため、摂南PBLが誕生したと言える。一定期間内にプロジェクトの目標達成のため、学生自ら課題を発見し、学部横断のプロジェクトメンバーと協働し、課題の解決に取り組む創造的・社会的な学びが特徴である。活動を支援するため担当教員と協働、連携・協力先との調整、広報発信、活動に同行しての対応など本センターと教務部の事務職コーディネーターの協力は不可欠である。

摂南PBLスタート時の五プロジェクトのうち、すさみ町での活動は二つ、翌年度には、すさみ町の津波対策をテーマとするなど同町関係で五つを含む九プロジェクトとなった。二〇一七年度は十八のプロジェクト（和歌山県関係は、すさみ町二件、由良町一件）において、三四三人の学生が活発な活動を展開している。

3. 摂南PBL「すさみ町における過疎地域活性化支援プロジェクト」

摂南PBL「すさみ町における過疎地域活性化支援プロジェクト」の指導教員は、外国語学部の浅野英一教授。浅野教授は地域連携センター副センター長や、摂南PBLの先駆けとなった学生支援GP取組責任者も務めた。浅野教授と私は二〇一八年に入り還暦を迎えた同年代であり、すさみ町活動で二人三脚、同志として学生の活動に毎回参画、「教職協働型でのコーディネーター活動」を展開している。「ボランティア・スタッフズ」と称する文化系クラブが本学にある。部員約一〇〇人を擁する代表的クラブでもある。青少年育成活動を目的とし、学部在学中に青年海外協力隊員派遣へ挑戦することを目標に、浅野教授が二〇〇七

年に立ち上げた。「すさみ町における過疎地域活性化支援プロジェクト」は、毎年度、五月連休の町PR最大イベントの「イノブタダービー」の運営企画で始まる。年四回、町には三泊から四泊滞在、貸切バスで町を訪問する。毎回、大型バス一台満員の約六〇人規模で活動を展開するため、PBLに参加する学生一五人だけでは人数が不足する。過疎地活性化に関する活動の課題調査・企画・調整・運営・評価などはクラブと兼務のPBL学生が行い、活動の実施段階ではクラブ学生が加わる。両者の指導者である浅野教授のもと、「PBLプロジェクトとクラブの学生協働型」で活動するのが特徴である。

現在の活動地域は、町役場がある市街地でマイクロバスに乗換え三〇分、中山間地の佐本地域。同地域は二〇一八年一月末現在、人口二二六人、世帯数一四七、六五歳以上の高齢化率が七〇%以上（一五二人）である。過疎と高齢化が深刻で、日常生活や地域コミュニティーの維持が困難になりつつある地域である。物理的な過疎化は、そこに住む人々の心の過疎化まで危惧されるため、学生は町役場と連携して高齢者宅を訪問する「なんでもやる隊」として「お宅訪問」活動を二〇一二年から七年にわたり年三回（二月・

三月・五月）実施し続けている。

学生の活動拠点となるのは、廃校となった町立の旧佐本小学校、体育館も併設されている学舎である。滞在中、学生はすべて自炊、寝袋で宿泊、シャワー設備は手作りである。

毎年八月の夏休みに、佐本小学校に寝屋川市他の小学生約五〇人を引率、三泊四日の「自然体験キャンプ」を実施している。地域の高齢者から「校舎に子供たちの元気な声が戻ってきた」との喜びの声が毎年寄せられる。このキャンプでは、学生が佐本の地域課題に向き合いその解決策として、二二〇年続いた山村のお盆の伝統行事「佐本川柱松祭り」を復活させ伝承する活動を展開している。



図1 何気ない会話にお互い笑顔一杯

4. 佐本地区での「お宅訪問」活動

二月上旬、二〇一八年に入り初めての「お宅訪問」に同行した。学生は、訪問二カ月前から役場・地元関係者と連絡調整、雨天時対応を含めた詳細な行動計画を立案する。大型バスが入れない佐本地区までは役場車両による運搬や学生の輸送配車を依頼するなど、事前の調整案件は多岐にわたる。一カ月前には、お宅訪問先となる約七〇軒の各住民に訪問日程打診の手書きハガキを郵送する。私は、町役場と連携し和歌山県からの活動プレスリリース発信の原案作成や調整、地元新聞記者への情報発信など学生の後方支援のほか教員と連携して現地での危機管理対応を担う。

「こんにちは、摂南大学です。何か困りごとはありませんか?」。学生三〇人が上級生と下級生二人一組になって佐本



図2 佐本地区お宅訪問

地域内の分担する九地区を自転車で回る。訪問先は坂道の多い集落に点在する馴染みのある一人暮らし高齢者宅。訪問に欠かせないのが、先輩から引き継いだ「見守り隊訪問ファイル」である。過去に訪れた先輩達が住民の好きな食べ物や趣味、訪問時の様子を書き留

めてあり、後輩のための訪問参考書でもある。毎年少しずつ厚くなる学生と住民の対話が詰まったファイルは「学生の財産」である。役場の幹部は、七年も活動を続けたことで、住民と強い信頼関係ができたと言語る。

学生の来訪で小学校に灯りがとまるのを毎回楽しみにしていた婦人が二〇一八年初めに亡くなられた。私も何度も訪問した小学校近くの高齢者二人暮らしのお宅。仏前に学生四人とお参りした。ご主人がお茶を入れ、学生から毎回届く葉書に目を細めながらも、「夜になると寂しい」と話しはじめた。学生達は、只々聞く側に徹する。私が奥さん



図3 自転車でお宅訪問に向かう

との思い出を語り出すと、アルバムを持ち出してくれ笑顔で学生に昔話を披露。二時間があつという間に過ぎた。別れ際、学生が「今度来る時は『ただいま』と言つてもいいですか」と聞くと、「ご主人は『どうぞどうぞ。なんなら泊まってくれてもええよ』と応えてくれた。

今回の長時間の訪問に地元新聞の記者が同行してくれた。紀伊民報の中陽一記者である。紀伊民報さんには、すさみ町を学生と初訪問した二〇〇九年年末の取材以来、歴代の担当記者にお世話になっている。以前、新聞の読者から「貴校の皆さまが紀南の地域活性化にお力添え下さっていることを常々地方紙上で拝見。学生さん方の活躍を頼もしく感じます。何事も新しい分野に歩みを進めるには苦勞がつきものです」との手紙が私宛に届いた。地元新聞が報じる活動記事や地域の方の激励は、学生にとって大きな励みとなっている。

学生の大学における人間関係は同世代の「横系の関係」であることが多い。お宅訪問活動では高齢者との「縦系の関係」でのコミュニケーションが求められる。世代を超えた何気ない会話を交わす中で、学生は自分自身を見つめ、「人と人のつながり」「人のために何か役立つ」ことの大切

さと喜びを学び成長している。学生がどれだけ成長したか、わが摂南大学でこれだけ伸びたという「のびしろ」を教員と協働し伸ばしていきたい。

すさみ町での活動を経験し青年海外協力隊員としてインドで活躍した卒業生が「学生は材料を持っているけれど、料理の仕方が分からなかった」と語ってくれた。地域から大学に持ち込まれる地域課題は、多くの場合、摂南大学という食堂に来店され、「何かおいしい料理を食べたい」と言われていることに似ている。顧客のニーズを把握し、シェフという教員と話し合いを重ね、新鮮な考えと若い行動力のある学生という材料をいかにおいしい料理、実りある活動に仕上げるか。学生がいかに成長するかが問われる。そのための料理メニュー作りを提案するのが事務職コーディネーターの役目、腕の見せ所であると思う。

5. やさしい

すさみ町での活動がモデルケースとなり二〇一四年八月には和歌山県で「大学のふるさと制度」が立ち上げられた。当初からすさみ町での活動を支援してくれた県の過疎対策課（現移住定住推進課）が主体となり、過疎対策の一環と

して、県外の大学と県内の市町村が連携し過疎地域などで行う交流活動を県が仲立ちする制度である。同年一〇月八日には、和歌山県庁で知事立会いのもと、すさみ町、由良町の両町長と本学学長が出席し「大学のふるさと協定」を締結した。現在、大阪と京都の六大学七件が協定を結んでいる。

すさみ町での本学の活動が由良町にも広がり、学生時代の活動をきっかけに和歌山県の「地域『人財』」として三人が本学から巣立った。すさみ町役場に二人、由良町役場に一人。三人に続く地方創生を担う人材を育成すべく、本学では、二〇一五年に和歌山大学の参加校として採択された文部科学省のCOC+事業において、二〇一六年度から地域を舞台にアクティブに学ぶ新たな教育プログラム「ソーシャル・イノベーション副専攻課程」を開講している。

前述のすさみ町役場で働いてきた一人、田内美紗希さんが、結婚のため二〇一八年三月末で役場を退職する。五年前「町の人たちに積極的に声をかけて自分を知ってもらうことから始めたい」と住民生活課で全力投球してきた。「すさみ町は『私の第二の故郷』。大学時代にここで暮らしたいと感じたとおり人の温かさ溢れる町でした。観光資源の

魅力多い町のために大阪に帰った後も何か役に立ちたい」と語ってくれた。

私は和歌山県橋本市の出身、すさみ活動で初対面の方々に「あんたも和歌山かよ」と親近感を持ってもらえる。和歌山県人のコディネーターとして活動できることは、この上ない喜びでもある。「地域を支え、

地域に支えられる」大学づくりを目指す和歌山大学の学長として「地域と大学を繋ぐコディネーターのネットワークを構築し『地域と大学』のあるべき姿を共に議論しよう」と六年前に全国の大学に呼びかけてくれた山本健慈先生。また、今回、本誌への寄稿という機会を提供くださった東奔西走で活躍の西川一弘・和歌山大学准教授。両氏にこの場を借りて心から感謝申し上げます。



図4 すさみ町役場で働く若い卒業生2人と